



最近感じることのひとつに現場での技術的な適応能力の低下があげられる。プロダクトにおける「現場力の低下」は、「失敗学」として、製造業全体の技能低下で語られることが多いが、われわれの建設の現場でも

似たような傾向がみられるようだ。

そもそも、建設プロジェクトは現場での設計変更が多い。その理由としては、建設プロジェクトでは設計図はあるべき姿を表し、施工図は実際の姿を現すことが当然として考えられていて、製造業では試作の段階で行われる生産設計が建築生産の現場で行われるためである。設計図は、見積が出来、施工図が描け、仮設計画が出来ればそれでよかった。したがって、現場での設計打ちあわせ、建築設備の調整に時間がかかり、関係者のマンパワーは多くかかるが、プロジェクトのメンバーはそのこと自体は当然の業務作業と思っていたので特別な仕事をやっているとは考えなかった。例えば、大型現場では建築図に設備のプロットされた「総合図」という平面詳細図は必要な図面と考えられていた。現場マンには、工程管理安全管理以外のVEという設計変更の提案能力もある程度あり、設計図の不整合を見抜く能力を持っていることも期待された。

しかし、現在では、経験のある現場の要員も減り、現場管理の書類も増え、現場では設計図のまま施工することが当たり前となっているようだ。しかし、設計図には相変わらず不整合もありそのまま施工すると問題が起こることも多いし、発注者の使い勝手もよくわかってはいないので、未確定の部分も多く残っている。

では、このような現状をどのようにすればよいのだろうか。いちばん簡単なのは、建設業も製造業のように初期段階での設計図書のレベルを上げることだが、このことは実は設計部門だけでは解決できない。詳細図をいくら早く描いても発注者のニーズも含めた設計をすることが出来なければ、設計変更は必ず発生する。また、メーカーの意見を聞かなければ結果的に納まりの悪いものも出てくる。しかし、現在においては「現場力の低下」を従来の経験主義的なキャリアアップやマンパワーの増加で補うことは現実的ではないだろう。経験的な「暗黙知」には期待できないし、IT化もメールによるコミュニケーションの向上以上には効果が出ていない。

未解決の課題ではあるが、建設プロジェクトにおいても関係者が現場着工時点であるレベルまで合意する仕組みは出来ないのかと思う。

三菱一号館・美術館 雑感・・・濱中冬行



先日、同期の友達が三菱一号館美術館に招待してくれました。6時半頃に中庭へ集合した時は、ビル風がうまく取り込まれていて、体感温度を下げ、さらに樹木から蒸散されるフィトンチッドが安らぎ感を助長

する効果と相まって、丸の内にあって新たな憩いの空間が提供されていると感じました。人工地盤の上に比較的大きな植栽（けやき）が植わっており、外構緑化が大きなインシャルコスト・メンテナンスコストを生じさせると感じたのは建築技術者としての悪い習性でしょうか？ 後日、周りのビルの約3倍の単価だそうだと聞いて、三菱のプライドを賭けた一号館再現だと知った次第です。

美術館ではちょうど「マネとモダン・パリ展」が開催されており、若き日にパリのオルセー美術館で見た作品が再度みられる機会を与えられて、人生の違う時期に同じ作品を見ても、以前に見たときのような同じ感動を生じるかどうか、新たな印象となるのかどうか楽しみでもありました。

絵画は、作者がどのような状況の時に描いたか、何をその絵で伝えたかったのかを想像し、それが見る側のイニシーションと同調したときに感動し、その価値があるというのが私の持論です。いくら高価な画家の絵であっても、それが無ければその人にとっては、無価値に等しいことではないかと、確かに構図、描き方、筆づかいや色づかいなどで他の画家と異なる技術的才能は認めるとしても。

今回私が最も感動し、興味を引いたものは、マネの描いた「すみれのブーケをつけたベルト・モリゾ」1872年（右図）でした。

モリゾ自身、画家でもあり、友人かつ師弟関係にありましたが、マネの才能を早くから見抜いていたモリゾは、自分がモデル兼愛人？になることによってマネに心酔してゆきます。当然、マネはすでに結婚していましたので、この絵が描かれた2年後にマネの弟と結婚します。（13ページにつづく）

